博　士　論　文（要約）

現代日本における専門美術教育を通じた作家養成
――美術系大学・学部における学生の文化獲得過程に着目して――

喜　始　照　宣

本論文は，現代日本における専門教育を通じた美術作家の養成過程について，美術系大学・学部（以下,「美大」という）の学生を対象とした経験データの分析をもとに，社会学的行為論，特にディスポジション形成の観点から解明することを目的とする。

序論では，本研究の問題関心が日本での美大を通じた美術作家養成過程の解明にあることを説明した上で，主に日本の高等教育における芸術・美術分野，及び芸術社会学における芸術家とその養成をテーマとした先行研究を批判的に検討した。そして，本研究における問いを設定し,分析の視座を示した。分析に用いる調査データについても概要を述べた。

第 1 章では，学生の出身家庭背景の把握，子ども時代における経験の共通性の探索を目的とし，質問紙調査の分析を行った。その結果，第 1 に，文化階層では上位だが，経済階層では多様な層の学生が美大という場に参入していることが全体的な傾向として示された。家族に芸術系の学歴保持者／職業従事者がいる学生は多数派ではなかった。第 2 に，子ども時代における家庭・学校での経験の共通性としては，小・中学生時の美術に関わる褒賞の蓄積，ひとりで日常的に制作活動を行うディスポジション，中 3 時の美術成績の高さの 3 要素が抽出された。さらに，多変量解析の結果，高校入学以前の段階において，美術に関わる褒賞を累積的に獲得し，日常的に制作活動を行うディスポジションを形成してきたことが，学校での美術成績を媒介した上で，その後の美大という進路の選択に正に影響したのではないかという仮説が提示された。

第 2 章では，質問紙調査及び聞き取り調査のデータを活用し，美術系高校や美大への進路選択の理由とその促進要因を抽出した。その結果，第 1 に，美術系高校進学の最も重要な理由として,「将来美術に関わる仕事がしたいと考えていたから」を挙げる者が最も多いことが質問紙調査より示された。しかし，聞き取り調査からは，幼少期から日常的に制作行為を身体化する中で,【専門美術（家）への憧憬】を抱き,「自発的に」美術系高校の選択をしたという語りもいくつか見られた一方，かれらの高校選択過程において,【他者からの役割期待】,【学力による序列化への違和・抵抗感】や【美術系高校文化との接触】がその選択の促進要因として働いたことが見出された。また，美術系高校進学後は，カリキュラム・トラッキングの効果や教員からの勧めによって，美大進学への水路づけがなされたことが示唆された。第 2 に，非美術系高校出身者の場合，美大進学の最も重要な理由として,「将来美術に関わる仕事がしたいと考えていたから」を挙げる者が最多であった。また，質問紙調査から，身近な他者による美大受験反対の有無を検討したところ，両親からの反対には出身地や父職が関係しており，専門美術を学び仕事にするという生き方のイメージ

の困難さがその背後にあることが示唆された。聞き取り調査からは,【制作行為の身体化】,【他者からの役割期待】,【美術系予備校・画塾／大学文化との接触】,【存在論的安心の確保】が，非美術系高校，特に進学校からの美大選択を促進する要素として見出された。

第 3 章では, 前半部で, 美大進学者に占める予備校・画塾経験者の割合や通学開始時期, 家庭・学校背景による経験の差異について検討した。そして，後半部においては予備校・画塾教育の有用性と機能について分析を行った。第 1 に，質問紙調査の結果から，分析対象である学生の 7 割以上が大学入学に際して，予備校・画塾の学科・コースに通学，あるいは講習会のみ参加の経験を持つことが示された。ただし，予備校・画塾経験者の有無は大学間での差が大きいことも同時に見出された。予備校・画塾への通学は，学科・コース通学者のみで見た場合，約 7 割の学生で希望進路が明確化する高校 2 年生・3 年生の時に開始されていた。他方，予備校・画塾経験の有無は，都市部出身であることや家庭の文化・経済状況によって左右されることが見出された。また, 美術系高校に通っていた学生では, 予備校・画塾の講習会のみを利用する割合が高いことも示された。第 2 に，聞き取り調査から，学生たちは，予備校・画塾での経験を，大学入学のためだけでなく，その後大学において制作活動を進める上での基盤となる技術や姿勢,「共通言語」を獲得するために有用なものとして語ることが見出された。また，予備校・画塾は，美大とその外部との「異質さ」を先取りして体感させる文化的「緩衝材」としての機能を有しているという仮説を提示した。その一例として，現役入学者が大学入学後に浪人経験者に対して抱く劣位性の感情，すなわち「現役コンプレックス」の語りを取り上げ，それを予備校・画塾の「緩衝材」としての機能を十分利用せず，美大という場に参入したことによって生じた「ハビトゥスのくい違い」の経験であると解釈した。現役コンプレックスの経験は，他者と比較するのではなく，自己の表現を追求していく中で対処されることなどが示された。

第 4 章では，予備校・画塾の経験度合いがその後の大学生活に及ぼす影響について，質問紙調査をもとに検証した。第 1 に，第 3 章での結果同様，予備校・画塾の学科・コース通学者の多くが, そこでの経験について肯定的な評価を下していることが明らかになった。第 2 に，予備校・画塾の経験度合いによって，大学生活での諸活動への熱心さや悩み・消極性に違いは見られるのかを検討した結果, 予備校・画塾経験の度合いが高くなるにつれ, 大学内外での制作活動に熱心となるが，他方で制作・研究のことで悩みがある傾向も増すことが示された。多変量解析を用いて，他の変数の効果を統制した上では，制作活動への取り組みに関しては, 講習会のみ参加した場合に熱心度が低くなる傾向があったが, 制作・

研究での悩みに関しては，予備校・画塾経験がある場合に高まる傾向が見出された。

第 5 章では，学生はどのような環境において大学生活を送っており，美大という場にどのような意味を与えているのかについて，聞き取り調査をもとに検討した。第 1 に，学生は,「自由」や「主体性」を基軸とする環境設定のもと，試行錯誤による表現行為の追求を行うことに注力した大学生活を送っており，そこでの制作活動の集大成として卒業制作が位置づけられていた。学生にとって大学時代は，自らの表現をめぐり不安や葛藤を抱きながらも，制作という実践の継続や他者との相互作用を通じて，美大という場に埋め込まれた価値観や作家的な生活スタイルを共通して獲得・身体化していく一方で，他者とは差異化された作家的アイデンティティを築き上げていく過程であると解釈される。第 2 に，学生たちは，美大について,「制作のための時間を確保する場」としての側面を前景化して語ることが見出された。さらに，かれらは，大学を制作場所としてだけでなく,「多様な存在・哲学が交錯する場」としても意味づけていた。自己の表現体系とは異なる多様な他者との関係性の中で，かれらは自己の相対的なポジションや作家的アイデンティティを見出していくのである。しかし，教員の働きかけや授業内容，講評会のあり方について不十分さを感じている学生もおり,「指導・批評のための場」としての限界が同時に指摘された。こうした限界は，学生の自由で主体的な学びを重視する環境設定や，その基盤にある制作に関わる人々の美術観から生じたものであると解釈された。

第 6 章では，制作活動に限らず，美大の多様な側面が学生に与える影響を検討するために，質問紙調査から，学生の大学生活満足度に着目した分析を行った。その結果，第 1 に，分析対象である学生の 8 割以上が大学生活に満足していることが示された。また，特に制作活動に熱心である者，芸術系学歴保持／職業従事家族がいる者は，そうでない者と比べて，満足度の平均値が高いことが見出された。第 2 に，多変量解析を用いて，他の変数の効果を統制した上では，制作活動への取り組み，過去の教育経験及び家庭背景による有意な効果は明瞭ではなくなった。美大では実技重視の教育体制が築かれており，学生も制作活動に注力した生活を送っているが，大学生活への満足度は，大学生一般での知見と同様，大学への多面的関与と関係していることが明らかになった。

最後に，第 7 章では，作家志望の学生による語りを中心に，かれらの卒業後進路選択の論理に美大という場の特性がどのような影響を与えているのかを分析した。第 1 に，作家志望者の学部卒業後のメインルートとしては大学院進学とアルバイト等従事があり，それぞれの選択に意図や戦略があることが確認された。第 2 に，作家志望の学生にとって，な

ぜ学卒直後の進路として就職が選ばれにくいのかについて検討した結果，美大という場の特性やそこで生み出される「就職」への独自の意味付けが関連している可能性が見出された。具体的には，制作重視の教育体制のもと，実技系教員や学生間での相互行為によって，「就職」に対する「制作の中止・趣味化」という意味が形成・維持されており，制作継続の確率が低減される選択肢は学卒直後の進路から遠ざけられていることを明らかにした。しかし，作家志望の学生であっても，制作継続のためであれば就職も一選択肢として考えており，学生たちは美術界と大学界それぞれが内含する制作主義と就職主義という 2 つの論理の狭間で，学卒後の進路に関して不安や葛藤を抱いている様子も同時に描出された。

結論では，本論（第 1 章～第 7 章）の知見を整理した上で， 3 つの論点を取り上げ，本研究の学術的貢献を示した。また，最後に本研究の限界と今後の課題について述べた。